

2011年度 私立大学図書館協会「海外認定研修」報告書

所 属 関西学院大学図書館

氏 名 伊藤 幸江

○調査・研修テーマ

北米(カナダ)における情報環境の変化の体験的調査(14年前との比較調査)、
およびオズボーン・コレクションの利用

○調査・研修期間

2011年 7月12日 ～ 2011年 7月17日

○訪問先

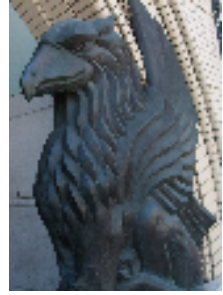
プリンス・エドワード島大学図書館 <7月13日>

トロント公共図書館 <7月15日>

- ・オズボーン・コレクション
- ・トロント・レファレンス図書館

以 上

北米の情報環境変化の体験的調査とコレクション利用 ーカナダ・トロントとプリンス・エドワード島の図書館の見学ー



伊藤幸江

はじめに

この夏、休暇を利用して、カナダのトロントとプリンス・エドワード島を訪れた。基本的には、心身のリフレッシュが目的だったが、情報のリフレッシュのための研修も付加することを目指した。

その後者の部分について、報告させていただきたいと思う。

近年の電子的環境の進展によって、大学図書館も大きな変化の中にある。しかし、そのことを仕事や生活の中で感じはするものの、自身でそれをしっかり確認したり、あるいは体験してみたりする機会を取れないまま、ここ何年も過ごしてきた。

特に大きく変化を感じさせられたのは、カリフォルニア大学バークレー校からの報告記事^①だった。大学図書館でライブラリアンが絶滅しつつあるという刺激的なタイトルでのこの記事は、日本よりさらに電子化が進んだ北米の大学図書館において、ライブラリアンが行うべき仕事がほとんどなくなってきているということが具体的な事例とともに述べられている。

以前、同校の東アジア図書館を見学させていただいたことがある。貴重な図書や古地図、遠藤周作の旧蔵書など特徴のあるコレクションに感銘を受けた記憶があり、それだけに大きな衝撃だった。14年前、職場の語学研修でトロントに4週間滞在し、トロント大学で行われた語学学校の英語研修を受けた後、北米のいくつかの図書館を見学した。カリフォルニア大学バークレー校はそのひとつだった。

今、北米では、図書館を取り巻く情報環境は、どのように変化しているのだろう。そして、日本もどのようになっていくのだろう。それを自分自身で確認したくなった。本来、海外研修といえば、進んだ取り組みのある大学図書館にアポイントメントを取り、その先進的な取り組みを見聞きさせていただくことが一般的だろう。

しかし、訪れる方も多い北米で、特にトロントは、過去の報告事例も数多い。また、大学という点では、トロント大学図書館での半年間の研修を基に充実した報告^②等が既に出されている。

今の自身に可能な形で、図書館を取り巻く情報環境の変化を体験してくる方が現実的である。このため、かつて4週間を過ごしたトロントの公共図書館を利用するという形での研修を目指した。特に、トロント公共図書館のオズボーン・コレクションの利用を中心とすることとした。

また、少女時代、『赤毛のアン(Anne of green gables)』のファンであったため、その舞台のプリンス・エドワード島も訪問し、図書館を見学した。それについても報告に加えたい。

5日半しか時間が取れなかったもので、移動に時間のかかる北米2ヶ所の訪問としては十分とはいえないが、自分なりに体験した北米の情報環境とその変化について、見学した資料の内容にも若干触れた上で記したい。

1. オズボーン・コレクション(The Osborne Collection)

(1)訪問のきっかけ

オズボーン・コレクションとは、14世紀から1910年までの主としてイギリスの子どもの本を集めた世界的に有名なコレクション^③で、日本ではほるぷ出版がその一部を『複製世界の絵本館』の中で復刻していることもあり、児童図書館や児童文学、英米文学などの関係者の中ではよく知られているものである。

筆者も『図書館雑誌』の記事^④などでこれを知り、興味深く思っていたが、14年前には絵本や児童書の古書というのが、大学図書館員には若干敷居が高く感じ、結局行かなかった。しかし、数年後にトロントの研修に参加した方から、筆者が好きそうだからと、このオズボーン・コレクションの展示のカタログなどを



オズボーン・コレクションのパンフレット

をいただき、それ以降、どうして行かなかったのだろうという思いにとらわれてきた。

本学は数年前幼児教育に定評の高い聖和大学と法人合併をし、その新しい教育学部や短期大学の蔵書には、これまでになかった絵本や児童書も含まれている。このため、大学図書館だから歴史的な児童書のコレクションが無関係ともいえなくなった。実際、オックスフォード大学にはオピー・コレクションという有名な絵本のコレクションもあり、子どもの本であるから大学とは関係がないという時代でもないようである。

しかしながら、筆者の絵本や児童書の歴史についての知識は皆無に等しい。博物館の展示ではなく、図書館のコレクションを見に行くのに閲覧資料の特定もせずに行くようではただの施設見学になってしまう。

(2)事前準備

このため、事前研修として数冊の絵本史の図書に目を通し、興味深い資料を見つけた。それは、『ちょうちょうの舞踏会とバッタの宴会(*The butterfly's ball and the grasshopper's feast*)』という絵本である。この絵本は、子どもの本に教訓色が強かった時代に、純粹に子どもに楽しみを与えるためだけに作られた最初の創作絵本で、近代絵本の先触れとなった^⑤とされている。

この絵本が興味深かった理由は、この絵本の初出が『ジェントルマンズ・マガジン(*The gentleman's magazine*)』に1806年11月に掲載された詩であり、また、絵本として初めて書評の対象となり『マンスリー・レビュー(*The monthly review*)』に1807年に掲載された^⑥ためである。長く雑誌担当であった筆者にとって、この2つの雑誌は、イギリス出版文化史を代表する雑誌のひとつと上司から伝え聞き、いみじくも14年前の本学図書館のグランドオープン時の一般展示にも使った資料である。

『ジェントルマンズ・マガジン』は、イギリスの近代総合雑誌のはじまりといわれ、初めて雑誌に「マガジン」という言葉を用って、多くの模倣誌を生んだ雑誌^⑦であり、『マンスリー・レビュー』は、評論(レビュー)誌のはじまりといわれ、18世紀半ばから半世紀にわたり、イギリスの論壇で書評を専門にする主導的な雑誌^⑧であった。

なお、この絵本は1807年に出版されたが、人気が高く刷りを重ねたため、1年で版が擦り切れ、翌1808年に別の挿絵で再販されたといわれている。この1807年の版はほるぷ出版から復刻され、1808年の版は1883年に出版されたファクシミリ版がある。

ともに本学図書館には所蔵がないが、前者の復刻版は同学校法人内の「おもちゃとえほんのへや」という機関で所蔵していたので、事前準備として見せてもらった。手のひらサイズの薄くて小さい簡素な絵本であった。

1808年の版について調べてみたところ、1883年に出版されたこの版のファクシミリ版が電子化されており、Project Gutenberg や Internet Archive で見る事ができた。

この Internet Archive は、先に触れたトロント大学図書館についての報告書⁹より、その存在を知った。トロント大学が Internet Archive に参加しているという記述どおり、見たものは同大学の John P. Roberts Library の所蔵資料であった。滞在中、この図書館を見学することはなかったが、このような形で資料を利用できる時代になったことを実感する出来事だった。

さて、このように復刻版や電子的なアーカイブで資料にアクセスできるのに、なぜわざわざ原本を見に行ったことを報告するのか、その理由については後述する。

(3) オズボーン・コレクション見学

オズボーン・コレクションは、100近いトロント公共図書館の分館のひとつのリリアン H. スミス館の4階に収められている。リリアン H. スミス館は、トロント大学のすぐ側にあり、見覚えのある通りを歩いていると、正面玄関に2頭のグリフィン像が門番のようにデザインされている建物が見つかった。

吹き抜けの中を階段を上がり、4階につくとガラス張りの扉があり、それを押してオズボーン・コレクション室に入った。



2頭のグリフィン像

『図書館雑誌』に報告を寄せられた梶原さんにアポイントメントを取っていたため、14世紀の洋皮紙に手書きされたイソップ物語やホーンブックをはじめとし、数々の貴重な資料を見せいていただき、訪問の前後に渡り、いろいろご教示いただいた。この場をお借りして、お礼申し上げたい。



階段から4階を臨む

オズボーン・コレクションは、イギリスの図書館員であるエドガー・オズボーン氏が、英米児童文学の入門書として名高い『児童文学論』¹⁰の著者リリアン・H・スミスを中心に行っていたこの図書館の児童サービスに感銘を受け、寄贈したものである。寄贈の際の条件として、専門司書をつけてコレクションを維持管理するとともに、今後も収集を続けること、目録を刊行し利用者の便宜をはかり、コレクションを一般公開することなどが出され、それが今も守られて、コレクションは当初の10倍以上になっているとのことだった。

なお、1996年の『図書館雑誌』での報告当時は、冊子体の目録が提供されていたが、現在はトロント公共図書館 HP 上の OPAC から蔵書検索ができるようになっている。

入り口正面のカウンタ前のある部屋には展示スペースがあり、訪問した際は、北米で人気があるカメのフランクリンという絵本に関する展示がされていた。奥の部屋が閲覧室で、そちらで資料を見せていただいた。

(4) 『赤毛のアン』の初版本

『赤毛のアン』の作者モンゴメリに関する著書¹¹もある梶原さんから、『赤毛のアン』の初版本も見せていただき、ファン冥利につきる経験だった。見せていただいたのは、一般に初版とされている1908年6月ではなく、同年の4月に complementary copy という市場販売前に著者・編集者・書評家などに配本されたもので、こちらこそが本当の初版と言える。

先に訪れたプリンス・エドワード島で見た初版は緑のクロスだったが、このクロスはベージュぽいピンクだった。これについて伺ったところ、表紙のクロスは、在庫が切れると別の色のものを使用していたらしく、1908年6月版だけでも、ピンク、緑、茶色などがあるとのことだった。こういった版や当時の出版事情についての情報は、コレクションがある図書館だからこそ得られるものかもしれない。

(5) ちょうちょうの舞踏会とバッタの宴会

『ちょうちょうの舞踏会とバッタの宴会』については、1807年の版と1808年の版の両方を見せていただいた。

1807年の版は、ほるぷ出版の元になったものだが、復刻版と違い原本は経年によるシミなどもみられ、また、実際に触れてみると紙質の違いなども感じられた。可能な限り原本に触れさせてもらえるのもこのコレクションの素晴らしいところである。

1808年の版の方は、手彩色のものをを見せていただいた。この絵本は、彩色ありと彩色なしのものがあつたとのことだが、手彩色の資料は、当時貧しい家庭や子どもなどが彩色していたということで、塗り方は様々、ものによっては一色で塗りつぶされたものまであるとのことだった。

Webのアーカイブで見た1883年のファクシミリ版は彩色のないものだったので、彩色の有無による違いも感じたが、もうひとつの違いとして、を見せていただいたものはA Winter's dayという詩が合冊されたものだった。テキストも挿絵もファクシミリ版と同じものではあるが、表紙のデザインが違い、挿絵ページの綴じの方向も、ファクシミリ版は文字ページと挿絵ページの絵が平行なのに、この資料は文字ページと挿絵ページの絵が垂直になっていた。

その後、いろいろ調べてみた結果、詳細は割愛するが、この1883年のファクシミリ版は、原本に忠実に復刻したものではないのではないかという結論に達した。もちろん、テキストや挿絵などに編集はないと思われるが、サイズや装丁などは原本とは違い、A Winter's dayも復刻の際に外されたのではないと思われる。

1883年のファクシミリ版は複数電子化されたものがあるが、1808年の原本とはまた別のものである。つまり、現在にあっては、やはりまだ原本に当たらなくては分からないことがあるというよい例であるように感じた。

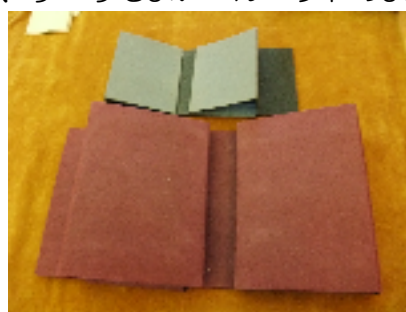
なお、オズボーン・コレクションでは、利用させることが前提となっているためか、こういった貴重な資料を快適に利用できるような工夫もされていた。

利用に際しては、まず、閲覧机に資料を傷めにくく、すべりもよいベルベットのよ
うな布を敷き、洋古書は綴じが固く全開してしまうと破損の恐れがあるものも多いため、背に合わせてスライドできる布張りの書見台のようなものを使って資料を閲覧する。こういった工夫は、利用者にとっても、快適なものであるように感じた。

電子化により、必ずしも所蔵先に行かなくても利用が可能となったが、本物を集めたコレクションは現代においてもやはり他に替えがたい貴重なものであり、それを紹介状がなくても利用できるオズボーン・コレクションの懐の深さを感じた。



閲覧室からエントランスを臨む



スライド式の書見台

2. トロント・レファレンス図書館(Toronto Reference Library)

(1)14 年前の図書館

オズボーン・コレクションを訪問後、トロント公共図書館のメイン館であるトロント・レファレンス図書館を訪れた。この図書館もトロント大学の近くにあり、筆者が14年前に滞在した時も何度か訪れたことがある。地上5階、地下階のある広大な図書館で、各階が大きな吹き抜けを取り囲むよう作られている。本学図書館の建設時、この図書館も参考にしたと聞く。一旅行者として利用し、写真撮影の許可を得なかったため、館内の写真はここには掲載しない。

14年前に訪れた際は、英語研修中ほとんど日本のニュースを入手する手段がなかったため、地下の新聞コーナーに朝日新聞の衛星版を読みに行ったり、見学を兼ねそこで宿題をすませたりもしていた。空間としても居心地の良い図書館だった。学生寮に滞在していたこともあり、Net を使いたければ、インターネットカフェに行くしかなく、見学先との連絡のEメールもUNIX、本学のOPACもWeb対応ではなかった時代である。ちょうど滞在中、学生寮にLANケーブルを引く工事がされていた。

当時の研修報告書には、「この図書館には山のような数のOPACに、セレクトされたインターネットの情報検索ができるWorldvue Workstationsの端末、CD-ROM専用機、マイクロリーダなどがあった。これらは申込制になっており、自分で端末の側にある時間ごとに区切ってあるスケジュール用紙にサインをするといった方式だった。公共図書館だけあって、健康相談の資料や情報を提供するカウンタなどまであった。また、ビジネスや会社関係の情報提供や語学学習者のためのカウンタやAVのブースコーナーがあった。利用者教育といったことも盛んで、雇用関係のセミナーなども安い金額で行っているようだった。」と書き、充実した最先端の図書館と感じていたようだ。

(2)現在の図書館

14年ぶりに訪れたところ、その充実した図書館という印象は同じままでありながら、やはり、時代の変化を感じさせられた。

事前にホームページ^②で調べたところ、トロント公共図書館では、無線LANがFREEで使えるようになっていることが分かった。筆者が持参したiPod touchでも、館内で快適にWebを利用することができた。そして、その環境を利用して、ノートパソコンや携帯端末を使っている人が非常に多かった。それだけではない。据え置きパソコンも以前よりはるかに多い台数が設置されており、特に1階フロア-奥はパソコン教室と見まがうほどの状況で、時代の変化を感じた。

もちろん、冊子体の資料は変わらず配架されていたし、同じように様々なサービスがなされており、紙のガイドやパスファインダーもたくさん用意されていた。しかし、新聞などのWebデータベースやNetLibraryなどの電子書籍のサービスも行われており、提供されるものも電子化していつていることを感じた。

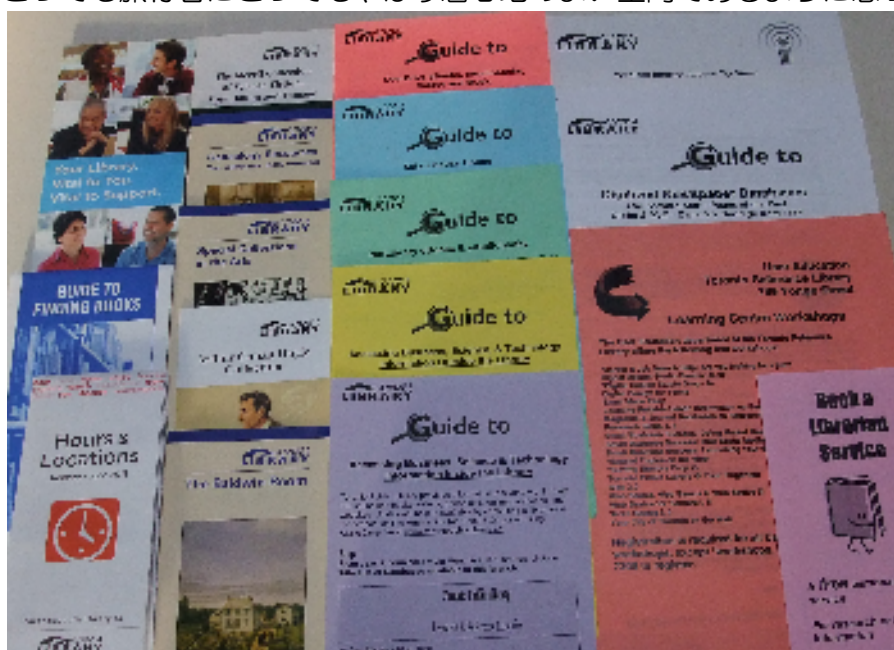
館内で提供されているパソコンは図書館カードの利用者IDと暗証番号や電話番号の下4桁で認証して使え、利用者に公平に提供されていることを感じた。また、高齢者やパソコンに不慣れな人を対象にしたパソコン講習会が頻繁に開かれているようである。それらは、Eメール、Webの基本に始まり、より高度な技術、また、リサーチスキルや就職支援、ビジネスに必要なスキルなど多岐にわたっていた。これとは別に言語学習支援にも力が入れられており、カナダは移民の国であるため、その言語的・経済的ギャップを公的サービスでカバーしているように感じた。

情報が電子化しても、「電子情報を使うための環境」と「使うためのスキル」を同時に公がサポートするというスタンスであるように思った。

あくまで短時間で個人的に見て歩いただけの印象をここに記したが、そのホームページを見れば、さらに様々な情報が提供されている。Web上のサービスが館外からもID認証で使えたり、独自のWebアーカイブやWeb展示、Annual Reportの公表や今後の方針等についての広報などがあつたりと多岐にわたっている。まさに大学図書館並みかそれ以上で、ホームページをもう一つの館としサービスしているように感じた。

そして、そのホームページの情報量に、必ずしもその場に行かなくても、かなりの量の情報とサービスが受けられる時代の到来を感じた。おそらく、このサイトを丹念に見ていった方が、短時間の見学よりも多くの情報を得ることができるだろう。

しかし、14年ぶりに訪れた図書館で受けた体験としての印象、あの大量のパソコンと、紙の本ではなく、ディスプレイに向かっていたたくさんの人々、これは訪れてみなくては体験できないものである。そして、そのように変わっていても、あの図書館は市民にとっても旅行者にとってもやはり居心地のよい空間であるように思った。



トロント公共図書館のガイド・パスファインダー

(3)時代の変化

図書館の帰りに、その近隣にあり、以前何度か訪れた書店にも行ってみようと思いついた。日本のジュンク堂書店のような隣接するカフェ(スターバックス)があり、図書をゆっくり読むこともできる大きな書店で、ゆったりしていてとても雰囲気の良い店だった。目印のスターバックスを見つけ、中央の吹き抜けのエスカレーターで2階に上がり、どんな本があるのだろうとあたりを見渡し、愕然とした。

そこには本はなく、洋服がたくさん陳列されていた。

間違ったのかと、慌てて1階に戻ったが、店の造りが明らかに記憶のままである。

どうやら、書店ではなくなってしまうらしい。もはやあのような書店は必要ない時代になってしまったのだろうか。

反対にトロントでは、図書館のみならず無線LANが使える環境が、日本より多く感じた。オズボーン・コレクションのリリアン H. スミス館は言うまでもなく、ホテルのロビーや空港、更に空港までのシャトルバスの中でも使うことができた。

それらの環境で、メールを使ったり、Webで情報収集をしたり、日本とスカイプでビデオ通話をしたりしながら、その便利さと時代の変化をしみじみと感じた。

3. プリンス・エドワード島大学図書館(Robertson Library, University of Prince Edward Island)

(1) プリンス・エドワード島大学

当初予定にはなかったのだが、若干の空き時間がとれたため、プリンス・エドワード島大学図書館を見学させていただいた。プリンス・エドワード島は、カナダで一番小さい州で、『赤毛のアン』の舞台となったことで有名で、日本人もよく訪れる場所である。観光も盛んだが、基本的に農業や漁業が盛んで、大都会トロントとは違うゆったりとした空気が流れていた。

プリンス・エドワード島大学は、州都シャーロットタウン郊外に位置し、学生数約 4000 人、少人数教育が特色で、人文・科学・経営・教育・看護・獣医学の専攻を持ち、学部教育に主力をおいている。

カナダ随一のニュース誌 Maclean's による 2010 年 11 月の大学ランキング(20th Annual University Rankings)[®]では、学部部門トップ 10 大学(8 位)に入っている。7 月の夏休み期間中のため、キャンパスは人影もまばらだったが、受験生のためのキャンパスツアーなどが行われていた。



プリンス・エドワード島大学図書館

(2) 滞在型図書館

事前のアポイントメントがなかったため、カウンタで見学の許可を得て、中を見せていただいた。キャンパス同様、夏休み中かつ開館すぐの時間でほとんど利用者がいなかったが、人を撮らなければと撮影許可もいただいたので、ある意味安心して見る



図書のオブジェ

ことができた。目を引くような最新の設備やサービスがあるというわけではなさそうだが、堅実にしっかりと学生に必要なサービスが提供されている図書館という印象を受けた。

建物自体も堅実な印象だったが、特に目を引いたのは、壁面にサイン以外の図書館らしいアート作品が飾ってあったことである。入館ゲートの脇の壁に図書をイメージしたオブジェや、2 階の壁面に図書の歴史をたどったアート作品があった。この作品や廊下のソファなどが滞在型図書館らしくつつろぎを生んでいるように思った。



図書の歴史をたどるアート作品

エントランスのすぐ側には小さなカフェもあり、その側には廃棄になった消耗図書などの古書を買っているコーナーがあった。収益は寄付に回すようだった。

(3) ラーニングコモンズ

1 階は中央がラーニングコモンズになっており、それを囲むように、貸出カウンタとレファレンス兼インフォメーションカウンタが設置されていた。ラーニングコモン

ズには半円形の大きな閲覧机があり、パソコンやプリンタも配置されていた。その奥には、電子機器を使ってはいけないコーナーなどもあった。

なお、北米では普通のことなのかもしれないが、コピー機以外にデータを USB に入れることができるスキャナーもラーニング commons に隣接した場所に用意されていた。

1 階には参考図書や政府刊行物などが配架され、コラボレート・メディアセンタ、ランゲッジラボ、ライブラリーインストラクションセンターがあり、そこで利用教育が行われているようだ。

(4) 書架と学習ゾーン

2 階には、一般図書と逐次刊行物があり、カレント雑誌や新聞については、個別のコーナーがあり、その前が閲覧席になっており、隣接してコンピュータラボが設置されていた。



図書の書架

図書や製本雑誌は書庫に配架されており、オレンジ色是一般書、青は製本雑誌のエリアのようだった。図書は LC の分類番号順に配架され、貸出期間は 3 週間、製本雑誌はタイトルのアルファベット順の配架がされ、帯出不可だった。

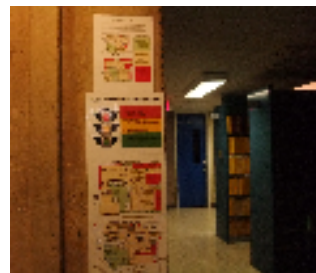
随所にキャレルが配置され、青いドアのグループ閲覧室、黄色いドアの個人用の閲覧室もあった。グループ閲覧室は、2 名以上で 3 時間単位の申し込み制で、部屋の中

にはパソコンがあり、電子ホワイトボードが設置された部屋もある。

この学習ゾーンは赤・黄・緑の 3 つに分けられ、赤は個人学習のゾーン、黄色はコラボレーションゾーン、緑はコミュニケーションゾーンのようだった。

2 階のサンルームは Super Quiet area とされ、そこでは静かに学習できるようになっている。

学部生に重点を置いているということから、書庫にもゾーンを表す掲示と製本雑誌架利用のセミナーについての掲示があり、利用教育が充実している印象を受けた。



(5) ウェブチュートリアル

後にホームページを確認したところ、図書館が行うツアーや講習会以外に、自分で見ることができる動画のツアー（通常分と iPod 用）や、説明が文字で書かれた Web ページ版もあり、スクロールして見ることもできる。カウンタでセルフツアー用の iPod も貸出しているようである。それ以外にもテーマごとのウェブチュートリアルの動画が用意されており、お国柄、一部フランス語のものもあった。

また、チャットによるオンラインレファレンスなども行われているようだった。

小規模だが、必要な機能は一通り詰め込まれた滞在型図書館という印象を受けた。堅実な学部教育を行っているこの大学図書館の事例は日本においても参考になる点が多いようにも感じた。

また、帰国後ホームページ^④を見て感じたことは、トロント公共図書館でも感じたことだが、その情報量の多さだった。ホームページを見ることにより、かなりの情報とサービスを得ることができる。このあたりも、参考にすべき点であると思った。

予定をして訪問したわけではないが、北米のスタンダードな図書館のありようを見せていただくことができ、とても有意義な経験だった。

おわりに

最初に述べたように今回の研修は、個人旅行に追加する形で、情報のリフレッシュを目的に行った。オズボーン・コレクション以外は、特にアポイントメントもなく、個人的に見せていただいた範囲の報告のため、詳細な準備を元に見学に行かれた方の報告とは質の違うものになっていると思う。

しかし、情報のリフレッシュという点では、この研修を通じて様々な体験ができ、それなりの成果があったように思う。そして、この情報のリフレッシュは、取るに足りないことのようにではあるが、これからの大学図書館のサービスを考える上で不可欠なことだと思う。提供したり、判断したりするためには、ある程度中身に対しての知識や経験が必要である。現在のように情報の媒体自体が変化している過渡期には、特に重要であろう。

また、絵本という大学図書館には比較的縁の薄いテーマではありながら、オズボーン・コレクションの利用を果たすための準備として、利用者の視点で資料を調査したり、まだ利用する機会がなかった Project Gutenberg や Internet Archive を利用できたことも今回の成果である。普段、利用よりも提供することの方が多い大学図書館員にとっては、研修という目的があってこそその利用かもしれない。

今回の研修は、海外での施設見学を主目的としたというよりも、利用を目的とした準備も含む体験の研修という視点で捉えていただけると幸いである。

①石松久幸 「今、アメリカの大学でライブラリアンと呼ばれる職業が絶滅しつつある--デジタル化がもたらしたものの?」 『出版ニュース』 2187, 2009.9, p.6-10.

②酒見佳世 「30年後の図書館とは?--トロント大学図書館の指す方向」 『MediaNet』 15, 2008.10, p.68-70.

③梶原由佳 「シリーズ・海外図書館事情を探る 第2回 オズボーン・コレクションへの招待--14世紀以降のこどもの本を集めた The Osborne Collection of Early Children's Books, Toronto Public Library」 『図書館雑誌』 90(5), 1996.5, p.306-308.

④ 同上

⑤桂宥子 『はじめて学ぶ英米絵本史』 ミネルヴァ書房, 2011, p.5,9-10. (シリーズ・はじめて学ぶ文学史; 8)

⑥三宅興子 『イギリス絵本論』 翰林書房, 1994, p.39-49.

⑦出口保夫 『イギリス文芸出版史』 研究社出版, 1986, p.45-48.

⑧出口保夫, 同上, p.58-61.

⑨前掲②

⑩リリアン・H・スミス (石井桃子, 瀬田貞二, 渡辺茂男訳) 『児童文学論』 岩波書店, 1964, 399p.

⑪梶原由佳 『『赤毛のアン』を書きたくなかったモンゴメリ』 青山出版社, 2000, 253p.

⑫<http://www.torontopubliclibrary.ca/>[参照: 2011-09-08]

⑬<http://oncampus.macleans.ca/education/2010/11/10/our-20th-annual-university-rankings/>[参照: 2011-09-08]

⑭<http://library.upei.ca/>[参照: 2011-09-08]